

Śṛṅgāraprakāśa における pratibhā について

本 田 義 央

0. ボージャは、ŚP 第 6 章において、文の意味 (vākyaṁ) としてのプラティバー (pratibhā) について論じている。その箇所がバルトリハリの VP. II. 117, 118, 143-152 にもとづいていることは、すでに Raghavan が指摘するところである。¹⁾ それらの偈頌で、バルトリハリはプラティバーを主題としてとりあげている。しかし、それらの偈頌に対する Vṛtti は 152 偈に対するものが現存するのみで、それ以外の偈頌について我々がこれまで利用できたのは簡潔なブンヤラージャ注のみであった。ŚP の記述は、ブンヤラージャ注以上の情報を含んでおり、VP の偈頌のより深い理解を可能にしてくれる。さらに、ŚP には、他の箇所でも Vṛtti からの引用がみられることから、プラティバーについての記述にも Vṛtti を反映している可能性がある。本論文では、VP のこれら偈頌のうち、第 143 偈を ŚP を通じて解釈し、それをバルトリハリの思想に跡付ける。

1. さて、VP. 143 は次の通りである。

vicchedagrahṇe 'rthānām pratibhānyaiva jāyate /
vākyaṁ itī tām āhuh padārthair upapādītām //143//

もろもろの [語の] 意味が孤立して理解されたときに、[それら語の意味とは] まったくべつのプラティバーが生じる。[そのプラティバーを] 文の意味とよぶ。[そのプラティバーは] もろもろの語の意味によって現出せしめられる。

この偈頌をブンヤラージャは、次のように注釈する。

孤立した (vicchinna) 「デーヴァフダッタ」等の語から、それらの [語の] 意味がまさに孤立して理解されるとき (vicchedenaiva grahṇe), すなわち認識 [される] とき、語の意味とはまったくことなる単一のプラティバーが生じる。そして、それを文法家たちは文の意味と呼ぶ。それ (プラティバー) の手段はなにか。[バルトリハリは次のようにいう] もろもろの語の意味によって現出せしめられる (upapādita) と、まったく非実在のウパーディである語の意味によって現出せしめられる、つまり、顕現せしめられる (abhivyakta)。²⁾

このいしかえだけの注釈から、バルトリハリの真意をわれわれがくみとることは

難しい。

2. さて、同偈に関して、ボージャは、次のように説明する。

プラティバーは、有益なものをとり無益なものをすてる根拠 (hitāhitapraṭtiparihārahetu) であり、活動に資する (pravṛtṭyanukūla) 知識 (buddhi) である。[それは] 語が、それぞれの意味を表示してから、[その表示機能を] 止めたときに、[それら] 語の意味の理解の直後におこり、「それ」とか「これ」とかいうようには指し示すことができず (idaṃ tad iti avyapadeśya), [他者の] 教示によって [その存在が] 知られることはない (anupadeśasiddhā). すなわち、語を根拠とするものであれ、[基体や接辞といった] 語の部分を根拠とするものであれ、意味のあらわれ (pratyavabhāsa) という〈部分〉(mātrā) が、孤立して (vicchedena) 「それぞれの知識に」おこる。このときこれら諸々の知は、順々とえられる語の意味によって [その] 潜在印象がうえつけられている。このような場合にプラティバーがおこる。[このプラティバーは] すべての語の意味のあらわれのつながりに扶助されており (sarvārthapratyavabhāsasamsargānuṅghīṭā), そのあらわれは差異をうしなっている (pratyastamitabhedapratyavabhāsa). [そのプラティバーは、それにもとづいて人がおこなう] 活動という結果の生起から推理されるものとして、まさに種を同じくするものであるが、[それぞれの] 人ごとに多様性をもって現れる。³⁾

ここでボージャは、(1) 行為論 (2) 因果論 (3) 認識論という三つの観点からプラティバーを説明している。

(1) 行為論の観点からとらえると、プラティバーは、言葉にもとづく人間の活動の根拠となる知識である。⁴⁾

(2) プラティバーがおこる過程を因果論的にみれば、つぎのようになる。「〈語 1〉〈語 2〉〈語 3〉……〈語 x〉」という複数の語からなる文をきく場合を想定しよう。まず、〈語 1〉をきくと、〈意味 1〉の〈知識 1〉がおこるが、その〈知識 1〉は、〈意味 1〉のあらわれという〈部分 1〉(mātrā) をもっている。ここで〈部分 1〉(mātrā) とは知識にあらわれる形相 (ākāra) のことである。⁵⁾ 次に〈語 2〉を開くとき、〈語 1〉の場合と同じように、〈知識 2〉は〈部分 2〉をもつと同時に、〈知識 1〉がもっていた〈部分 1〉を潜在印象としてもっている。このようにして、〈語 x〉を聞いたときにおこる〈知識 x〉には、〈部分 1〉〈部分 2〉……〈部分 x〉がすべてそろうことになる。この段階で、プラティバーは生じる。しかし、この段階では、それらの〈部分〉は、無順序に〈知識 x〉にあらわれているにすぎず、それらの〈部分〉がひとつつながりに統合されなければ、文の意味は理解されないはずである。この点に関しては、さらに次の (3a) の観点からの考察が必要である。

(3) はさらに (3a) プラティバーの認識論的な構造, (3b) プラティバーそのも

のをわれわれはどう認識するか、という二つの観点から説明されている。⁶⁾ (3a) の観点は、さきに (2) でみた最終の知にある無順序な複数の〈部分〉がどのように関係するか、という問題である。ボージャが、プラティパーが「それがもつすべての意味のあらわれのつながり (samsarga) によって扶助されている」というのは、この点である。ここでいうつながりとは、限定関係という関係 (viśeṣaṇaviśeṣyabhāva) のことであり、その関係の下に複数の語の意味がそれぞれ限定者と被限定者として統合されるということである。その統合の際には、主従関係 (guṇapradhānabhāva) によって、文のなかの動詞から理解された主要素である行為 (kriyā) が被限定者となる。そしてそのようにして、限定関係という関係のもとに統合されたならば、それぞれの語の意味は差異をうしなう (pratyastamitabheda)⁷⁾ このように、プラティパーは、複数の語の意味のあらわれを同時にかつ統合的にとらえる知識なのである。

3b) の観点からみれば、プラティパーは、人が言葉を聞いておこす活動から、自分のプラティパーと同種のもを他者ももっている、というように一般化することにより、各人に個別的にあらわれるものではあるが、推理の対象となる。

3.2 で検討した ŚP は明らかに次の Vṛtti をふまえている。⁸⁾

sarvaviśeṣaṇaviśiṣṭam hi vastu samsargiṇinām mātṛāṇām kalāpam yaugapadyenaikasyā buddher viśayatām āpannam uttarakālam icchan buddhyantaraiḥ pravibhajate / pravibhaktasyāpi cānusandhānam antareṇārthakriyāviśayā pratibhā notpadyate iti punaḥ samsargarūpam eva pratyavamṛṣati / あらゆる限定要素によって限定されたもの (vastu) である、諸関係項の総体 (kalāpa) は、同時に単一の知識の対象となる。そののち、[その総体を、人は] 恣意的に他の複数の知識によって、分析する (pravibhajate)。しかし、分析されたものも統合 (anusandhāna) されなければ、有効な作用 (arthakriyā) を対象とするプラティパーは生じない。したがって、再度、まさに繋がりを本質とするもの (samsargarūpa) を反省的にとらえる (pratyavamsati) のである。

文の意味という、すべての限定要素によって限定された総体は、一つの知の対象となる。しかし、ひとは、その総体に、それを構成する部分を概念的に設定しなければ、それを理解することはできない。なぜなら、時間的に順々に (krameṇa) 発声される語を同時に認識することはできないからである。Paddhati によれば、反省的把握 (pratyavamarśa) とは、語から経験された意味の形相を確定すること (ā kāranirūpaṇa) であり、統合 (anusandhāna) とは、語から理解された複数の意味を相互に限定するものとして決定すること (avadhāraṇa) である。⁹⁾ したがって、知識にあらわれた複数の形相は、確定をへて、相互の限定関係のもとに統合されるとい

うことになる。そして、これらは、プラティパーという知識がはたす機能である。それがなければ、言葉にもとづく意味伝達は説明がつかないのである。

以上のように、ボージャは、Vṛtti を理解したうえで、ŚP を著している。したがって、我々は、ŚP を通してより深くバルトリハリの思想をすることができるのである。

[略号] ŚP: V. Raghavan, ed. 1998. *Bhoja's Śrīngārāprakāśa*. HOS 53. VP: *Vākya-pāḍīya* (偈頌番号は Rau 刊本, 注釈は Iyer 刊本による。)

- 1) V. Raghavan, ed. *Bhoja's Śrīngārāprakāśa*. (Madras, 1978), pp. 707-710.
- 2) プンヤラージャ注で注目しておかなければならないのは、VP II.144 中の 'prtyātmavṛttisiddhā' について、「自己認識によって証明される」(svasamvedanasiddhā) とする点である。この理解は、次に述べるボージャの理解「各人にあらわれる」(pratyātmam vivartate) とはことなる。
- 3) ŚP 339, 2-7.
- 4) (1) は、VP II.146a-147 におけるバルトリハリの視点である。
- 5) ここで、mātrā が知識にあらわれる形相 (ākāra) であるという点については、H. Ogawa, *Bhartrhari on Representations (buddhyākāra)*, *Proceedings of Third International Dharmakīrti Conference*, p. 173 をみよ。
- 6) VP II.144 におけるバルトリハリの観点である。
- 7) ここでの「限定関係という関係」「主従関係」については、小川英世「パーニニ文法学派の文の意味」(『前田記念仏教文化学論集』1991, pp. 543-562) を参照せよ。
- 8) Vṛtti ad VP.1.24-26.
- 9) Paddhati on VP.132

〈キーワード〉 pratibhā, Śrīngārāprakāśa, Vākya-pāḍīya, Bhoja, Bhartrhari

(広島大学助手, 文学修士)